

主体的に探求する「総合的な学習の時間」の実践

前メルボルン日本人学校 教諭

大分県大分市立植田中学校 教諭 恵 藤 美 貴

キーワード 総合的な学習の時間、探求、少人数、主体的な学び、課題設定、キャリア教育

The Japanese School of Melbourne

メルボルン日本人学校

URL : <https://jsm.vic.edu.au>

児童生徒数 Prep (幼稚園) 1名 小学部33名 中学部14名 計48名 (2023年度在籍数)

1 はじめに

総合的な学習の時間 (以下「総合」と表記) は、子ども達が予測不能な未来においても仲間とともに課題を解決しながら生きていく方策を習得する手立てとして重要な学習である。私はこれまでも、できる限り生徒が主体となって課題を探求する「総合」を展開させようと取り組んできた。しかし実際には、教育課程が縛りとなったり、学年生徒数に対する学年部教員の人員の少なさであったり、行事の多さであったりと、いろいろな理由から思うような「総合」を行えないというジレンマの中で、“生徒が課題を設定したと思わせるように仕向けてはいるが、実は指導者の準備したレールに乗せて走らせる”「総合」の授業を行うので精一杯であった。いつかは生徒自らが「本当に」探求したいと思った課題を、彼ら自身で組み立てた学習計画に沿って学ぶことのできる「総合」を実践したいと思っていた。

このたびの赴任先であったメルボルン日本人学校はごく小規模な学校である。そのため、これまでよりも柔軟な教科指導ができた。そこで、2023年度の「総合」はとことん生徒主体の探求をさせよう、私はそのサポートをしようと考え、本実践を行った。

2 基礎情報

- (1) 実践校 メルボルン日本人学校 G7 (中1) 男2名、女3名
- (2) 実践期間 2023年4月～2024年3月
- (3) 教育課程 キャリア教育 (上級学校の仕組みを知る・職業を知る)
本実践の活動と並行して、中学部全体で職場訪問を実施した

3 実践

(1) サイクルI 1学期の取り組み

① 課題の設定

まず「本年度の『総合』の課題を決めるため」という目的を説明した上で、ロイロノート (ロイロノート・スクール) に「私の頭の中」というテーマで各自マッピングを行わせた。今自分が気になっていること、調べて

みたいこと、興味のあること、楽しいこと、悩み、イライラすること、なんでもいいので思いつく単語を自由に書き込ませた。その後、分類し、発表させた。

生徒は、各自の発表を元に話し合い、未来のことや環境のことに関するワードが多く共通して挙がっていたことに気づいた。そこに着目し、本年度の探求課題を設定した。本年度の探求課題は、「6年後の未来のために、私たちは今のような力をつけるべきか」と決めた。

「6年後」とした理由は、「現在中学1年生である自分たちは、6年後、18歳。高校を卒業し、選挙権を得る年齢だ。大学に進学する者もいるだろうが、社会に出て働いているかもしれない。そのときに困らないよう、今から必要な力をつけておきたいから」というものであった。

② 情報収集

テーマは決まったが、その先の探求の方策の立て方について、十分に指導せず次の2つの情報収集活動をさせた。この時生徒は、これらの活動の目的や意図がよく分かっていなかったことが、後からわかった。

○未来の自分はどのような職業についているかを知りたい⇒職業診断を実施した。

○職業・環境・経済の観点で未来の社会がどのようになるかを調べた。

③ 整理・分析

調べた内容については割愛するが、まとめると各観点は以下ようになった。

職業=AIに奪われるが仕事はコンピュータの台頭で楽になるだろう。

- ・人間にしかできない仕事をする力が求められるだろう。
- ・プログラミングの知識・技能が必須となるだろう。

環境=温暖化が止まらない→不作、不漁→生態系の破壊→食糧難→貧困・飢餓

経済=天候不順→世界的にモノ・食料の不足、貿易摩擦で物価上昇、格差

④ まとめ・表現

職業・環境・経済について調べてロイロノートにまとめた資料を示しながら、互いに発表し合わせた。「未来は暗い予想が多い」「いいことが少ない」というネガティブな感想に集約されたが、「どうにかしてよくしないと」という気持ちも生まれていた。この、まとめと感想をふまえて、次は「6年後の未来のために身に付けるべき力は？」(図1)という当初のテーマに加え、「未来のために自分たちにできること」についても話し合おうということになった。



図1 みんなの考えた「付けたい力」

話し合った結果、「個人で努力して身につけられる力は個人で付けることにしよう。学校では、人との関わりの中で身に付けたい力を実際に付けられる活動しよう」とまとまった。ここで、その活動を行うにあたって必要な時間数、予算などの計画を立てる必要があることを指導した。さらに、年度末に今年度の「総合」で学んだことをまとめ、保護者を招いて発表会を開くことを提案し、生徒のモチベーションと目的意識を高めようとした。

(2) サイクルⅡ 2学期の取り組み

① 課題の設定

年度初めに探求しようとした課題「わたしたちは今どのような力をつけるべきか」については図2の通りまとめることができた。

「人との関わりの中で付きたい力」は「コミュニケーション力・問題解決力・リーダーシップ・マネジメントスキル」であった。(図2)

そこで、2学期はこの「人との関わりの中で付きたい力」を付けるための活動を考え、実際に行うことになった。その活動が「未来のために自分たちにできること」であることも生徒たちの中で重要な視点となった。

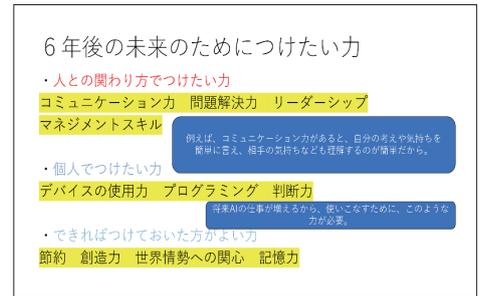


図2 話し合ってまとめた「付きたい力」

② 情報収集

「コミュニケーション力、問題解決力、リーダーシップ、マネジメントスキルを身につけるために」「未来を明るくするために私たちにできること」という視点で、どんな活動を行えばよいかを出し合った。

この話し合いを行う前、国語の授業で夏休みの学びをプレゼン発表する時間があった。生徒は思いのテーマで自分の調べたことを発表した。さらに、生徒の1人が夏休みにオンラインによる学習会(JOES Davos Next: 海外子女教育振興財団)に参加していたので、その学習の成果についても発表させた。海洋資源を守ることの重要性やマイクロプラスチックの影響、安全で持ち運べる水の話などをクラスメイトは興味深く聞いていた。この発表がきっかけとなって「持ち運べる水(Oohoオーホー)」に興味をもち、2学期の「総合」の活動の中で作ってみたいという意見が出た。この他、「1日学校でカフェを開く」「海岸清掃をする」「小学生に環境の大切さを教える授業をする」「もっとプログラミングの勉強をする(生徒は、6年次より通信大手のソフトバンク株式会社のご協力の元、プログラミングを学んでいる。中学部で1学期に企業訪問も行った)」など、過去の経験を想起したり、インターネットで他校の取り組みを参考にしたりしながら様々な意見を出し合った。

③ 整理・分析

生徒は活動を様々な観点で分類し、妥当性を検討して活動を2つに決めた。私は、活動は1つと考えていたが、生徒から「どうしても2つしたい」「このような計画ですれば2つできる」「活動ごとにそれぞれ行う意義がある」と提案があったため、2つとも行うこととした。

④ まとめ・表現

〈活動I 持ち運べる水「Ooho(オーホー)」を作ろう〉

「未来のために今、私たちにできること」であり、環境への意識を高め、みんなで活動することで、コミュニケーション力を高めることができる、という意図をもって行った。他学年も休み時間に見に来て、大勢が興味深く活動に参加してくれた。材料については、オーストラリアで入手可能な薬品等であったが、日本から簡易キットを取り寄せて利用した。



生徒の発表スライドより Ooho作り

〈活動Ⅱ エコバッグを作ろう〉

自分たちで計画、実行することで「コミュニケーション力、問題解決力を身に付けることができる」。それは作ったエコバッグを使うことで環境に配慮できる、という意図をもって行った。

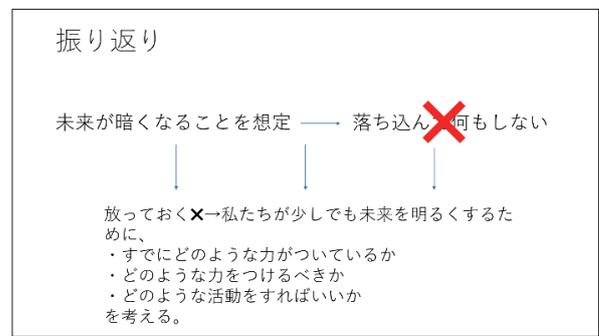
完成までの計画を立て、インターネットで型紙や作り方、必要なもの、買い出しの場所や予算、交通機関等を調べ、説明書を読みながら学校のミシンを動かして作った。

買い出しでは、オーストラリア在住であるものの、普段日本語中心の生活をしているため、英語での対話に自信のない生徒もいたが、全員が布と糸を買うために店員さんと英語で会話することができた。普段保護者と車で移動することが多く、バスでの移動が初めてという生徒も数名おり、よい経験になっていた。

2つの活動を終えた後、全員で分担してひとつのプレゼン資料を作成し、学年末に保護者に発表をした。メモを持たず発表し、質問にも的確に応答できた。発表の中で各自、自分の作ったエコバッグを掲げて見せながら制作の苦労話をするなどの工夫もできていた。非常に内容の濃い発表で、保護者にも好評だった。

(3) 学習を終えて一生徒の振り返りー

- 活動を通して判断力、問題解決力は付いたが、コミュニケーション力、マネジメントスキル、リーダーシップはまだまだ。買い出しやOoho作りがうまくいったことや、エコバッグ作りが計画通り行かなかったことを通して、計画性の大切さもわかった。
- 未来について知って暗い気持ちになったが、落ち込んで何もしないのはよくない。自分が少しでも未来を明るくするために、すでにどのような力がついているか、今後どのような力をつけるべきか、どのような活動をすればよいかを考える。
- 環境問題は意外と身近にあること、自分たちの行動次第で環境が変化することに気づいた。計画力、発言力、コミュニケーション力、そうぞう（想像と創造）力が身に付いた。
- 暗い未来は話し合いや活動によって明るく変えることができる。でもあまり重く考えてもできることは少ないから、自分にできることをできる範囲でしながら過ごしていけばよいと思う。



生徒の発表スライドより 振り返り

4 考察

本実践は、少人数である利点を生かし、生徒の思考に沿った「総合」的な学習の時間を行えたと言えるであろう。環境問題やキャリア教育を教師主導で学ばせた時とは異なる手応えを感じた。教師主導の授業では、与えられた課題に合う答えを探すような学習を生徒にさせてしまっていたのではないかと思った。例えば環境問題を扱って授業をすれば、当然生徒は知識として世界の現状やSDGsの内容を学び取り、環境への意識が高まるのだが、それはどこまで実感を持ったもので、未来の環境を守る実践者としての行動の変容を起こさせるものであったらどうか。今回、教師は課題を準備せず、一から生徒に考えさせた結果、生徒はとても強い実感を持って「将来のために今、自分がどういう行動を選び取るべきか」を認識したように感じられた。

しかし本実践は初めから順調にいったわけではなかった。私は4月の始動の時点から、生徒に委ねていたつもりになっていたが、1学期の終盤までは課題を決めた後も、生徒は自分たちが何を探求しているのかを理解で

きていなかった。原因としては導入の説明が不十分だったことが考えられる。課題を再確認し、2学期以降の活動のイメージを持たせ、自分たちが「したい」と思ったことが実現できるとわかってからようやく生き生きと考え、主体的に活動し始めた。これは、学びは教師から与えられるものだという考えが生徒の中に強く意識付けられている証拠ではないかと思った。教科の授業も、生徒の発言から授業のめあてや課題を設定することで主体的な学びを生むことを求められているが、教師の独りよがりな展開にならないよう、課題を生徒と共有し、生徒自身が「ぜひ知りたい、ぜひしたい」と思わせることが重要であることがわかった。今後も、生徒が「知りたい」と思える課題の設定、「したい」と思える活動の設定を通して、生徒の学びを深く、能動的なものにする授業を開発していきたい。

- 参考文献 中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 「総合」的な学習の時間